

医療通訳ウェブ教材開発について

Virtual Medical Interpreting: Development of a Web-based Medical Interpreter Training Program

大野 直子^{*1}, 加藤 純子^{*2}

Naoko ONO^{*1}, Junko KATO^{*2}

^{*1} 順天堂大学 国際教養学部

^{*1} Faculty of International Liberal Arts, Juntendo University

^{*2} 大阪大学

^{*2} Osaka University

Email: na-ono@juntendo.ac.jp

あらまし：本研究では、日本でことばに不自由なく診療が受けられる環境を整備するべく、日本の外国人医療を促進するために医療通訳の人材を育成することを目指し、日本初の試みとして医療通訳ウェブ教材を開発した。この教材は病院で交わされる典型的な対話を含めた Web 教材で、患者が病院に受診する際の通訳という状況設定で通訳を体験できる。本研究により外国人医療の言葉の障害による医療格差の問題を解決する一助となることを目指す。

キーワード：ICT 教育, e-Learning, 医療通訳, Moodle

1. はじめに

日本におけるグローバル化は進んでおり、医療においてもそれは例外ではない。アジア各地における医療観光がますます盛んになり、日本でも、一部の医療機関で外国人患者の受け入れを始めている。外国人医療の問題としては、言語習得が不十分である場合、同一言語での診療に対して、誤解やコミュニケーション不全に陥りやすいなどの点がある。さらに、言葉の壁が原因で、治療に対する積極性に差が生まれ、健康格差につながるという報告もある⁽¹⁾。

コミュニケーション不全や健康格差を防ぐべく、在日、訪日外国人と日本の医療をつなぐ存在が医療通訳であり、その重要性はますます高まっている。しかしながら、即戦力となり最も身近な解決策として医療通訳が必要とされているにも関わらず、国内で医療通訳は未だ十分に機能していない⁽²⁾。

日本国内における医療通訳に関する問題の一つに、医療通訳の教育システムが地域や自治体によってまちまちであることが挙げられる⁽³⁾。

医療通訳教育に関しては、米国などの海外では、オンラインで医療通訳の講座を開講している団体もあるが、日本ではまだ少数である。医療通訳の通信講座を開講している東京通訳アカデミーでは、テキスト配布と週 1 回の Email での課題の通信添削指導、また月に 2, 3 回程度の予め定めた日時において Skype を使って 30~60 分間の通訳技能レッスンを行っている。しかし、現在オンライン学習や遠隔教育を含めた医療通訳の教育プログラムを実施しているところは民間の教育機関が多く、また国内の NGO や大学における医療通訳講座も歴史が浅いことから、実践効果の学術的評価はまだなされていない。

本研究では、日本でことばに不自由なく診療が受けられる環境を整備するべく、日本の外国人医療を

促進するために医療通訳の人材を育成することを目指し、日本初の試みとして医療通訳ウェブ教材を開発した。この教材は病院で交わされる典型的な対話を含めた Web 教材で、患者が病院に受診する際の通訳という状況設定で通訳を体験できる。

2. 方法

大野⁽³⁾が文献調査で明らかにした医療通訳に必要なスキルは 1) 正確な通訳, 2) 医療用語や人体に関する知識, 3) 医療通訳倫理, 4) 非言語コミュニケーションスキル, 5) 異文化コミュニケーションスキルである。これらを身に着けるための e-Learning システムのパイロットプログラムを、Kern⁽⁴⁾の提唱する 6 段階アプローチに基づき開発する。開発の際には、国内外の医療通訳に関する先行文献を参考に、プログラムを作成する。

3. 結果

医療通訳に必要なスキルを身に着けるために、Moodle を用いて e-Learning 教材を作成した。本教材の内容は、以下のとおりである。

正確な通訳力の向上に関しては、病院での典型的なやりとりをシナリオとして作成し、オンラインでロールプレイ練習を行うこととした。

医療に関する専門知識は、医学用語と解剖学の基礎知識、各解剖に関連する代表的な疾患、医療現場で使用されるわかりにくい専門用語の理解に関して、資料の読解による知識の伝達と、オンラインでの確認テストを作成した。

非言語コミュニケーションスキルに関しては、非言語コミュニケーションに関する概要を e-ラーニングで学ぶこととした。

異文化コミュニケーションスキルに関しては、諸

外国の医療制度や、各地域の医療に対する考え方や独特の慣習等の基本的な知識に関して e-ラーニングで学習することとした。

倫理に対する理解については、米国の医療通訳養成団体の CCHCP が e-ラーニング講座にならない、まず資料を読むことで倫理に関する一般的知識を理解し、その後、患者から医療通訳者が物をもらったかどうか、など具体的な状況設定を提示し自分の行動を記述、提出することとした。

プログラムの画面を以下に提示する(図 1, 図 2)。



図 1 Moodle によるプログラム画面 A

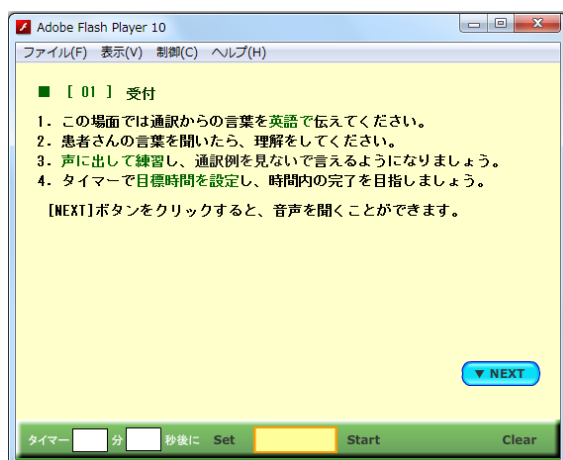


図 2 Moodle によるプログラム画面 B

e-ラーニングプログラムをオンラインで終えた後、理解度確認テスト（選択式，記述式）を行うこととした。これらの方法により効果的に医療通訳に必要なスキルを身に着けることが出来ると考えられた。

4. 今後の課題

医療通訳教育の e-ラーニング適用に関する今後の課題としては、以下の点が挙げられる。

プログラムのタイプ、学習者の特性に応じて、介入後どの程度の知識・技術レベルまで達していることが必要であるか具体的な目標設定を行い、その目標に応じて達成度の測定用具を決定することが必要

である。

学習すべき項目のうち、学習目的に合わせた優先順位を決めて効果的な介入方法を検討する。プログラムのどの時点で、どの項目をどう学習するのか、どの程度の長さで行うのかを、優先順位に応じて決定する必要がある。

プログラムのコスト（予算，人的資源，開発時間）に関して、実際のリソースを把握し現実的な企画を立案する必要がある。

e-ラーニングのコンテンツの更新や受講者からの技術的な問い合わせ対応に関して、初期立ち上げ後も継続的に実施できるよう体制を整える必要がある。

学習者の e-特性に関しては、医療通訳のボランティア的な現状から、学習者は家庭の主婦が最も多く、e-ラーニングが得意ではない世代であることより、技術面が導入するうえで障害となる可能性がある。この点を考慮に入れて、操作しやすい、誰でも簡単に使えるシステムを考慮する必要があると考えられる。

また医療通訳プログラムの受講は単位付与がなく必須ではないことから、受講者のモチベーションを維持するための仕組み作りも、プログラム成功の鍵になることが考えられる。

5. 結論

医療通訳教育への e-ラーニング導入に関して、先行研究調査を通じて考察を行ったうえで、プログラムを開発した。今後、医療通訳教育に関して、開発した e-ラーニングプログラムをより効果的に実践するためには、授業の構成と実践、評価を通じて継続的に検討を行う必要がある。

6. 謝辞

本研究は、平成 26 年度科学研究費補助金・研究活動スタート支援「在日・訪日外国人のための医療通訳養成システム構築に関する研究」（課題番号 26893276，代表：大野直子）の支援を受けた。

参考文献

- (1) B. C. Schouten, L. Meeuwesen, F. Tromp, H. A. M. Harmsen.: "Cultural diversity in patient participation: The influence of patient's characteristics and doctor's communicative behavior". Patient Education and Counseling, Vol.67, pp.214-223 (2007)
- (2) 川内規会.: "日本における医療通訳の現状と課題-外国人診療に関する調査から-", Kyushu Communication Studies, Vol.9, pp.25-35 (2011)
- (3) 大野直子: "医療通訳における必要スキル-文献考察と国内外プログラム概観-", 教育研究, 第 55 号, pp.317-326 (2013)
- (4) Kern D. E., Thomas P. A., Howard D. M. and Bass E. B.: "Curriculum Development for Medical Education: A Six-step Approach". Md: Johns Hopkins University Press, Baltimore, (1998)